

教団新報

定価 1部140円(本体133円+共200円)
予約購読料 1年分 5,000円
紙代のみ 3,500円
振替 00140-9-145275
本紙を購読ご希望の方は、前金を
そえて、お近くのキリスト教書店
へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546
FAX03(3207)3918
発行人 内藤留幸
編集主筆 竹澤知代志
印刷所 株式会社きかんし



宮本義弘宣教研究所委員長、熱心に聞き入る常議員たち

第37総会期

第4回常議員会

1 2 3 4 5 6 7

救援募金と伝道は教団の両輪

会館問題小委員会設置

第37総会期第4回常議員会が、10月17・18日、教団会議室に於いて、常議員30名全員の出席で開催された。各教区議長またはその代理者も、沖縄教区を除いて全員出席した。

前回に続いて、議事に先立ち開会礼拝が持たれ、長崎哲夫常議員が、コリントの信徒への手紙二・8章9節に基づいて説教した。

エルサレム教会の信徒への援助について「募金を通して、神の大きな恵みが実現している。マケドニアの諸教会の危機的な状況の中でこの募金は行われた。福音宣教と募金運動が車の両輪となった。3・11以来全教団が一つとなって、悲惨な状況下にある教会の復興に取り組んでいる。一致して深い学びと行動を持って

いる」と語り、昔も今も伝道と募金・援助が密接に結びついていることを強調した。総幹事報告を巡って、それぞれの項目について、重大事から細々したことまで踏み込み、時に白熱した質疑が行われた。

キリスト教会館の耐震工事について、簡易診断を行った結果、精密診断をする必要性があること、深刻な状態であることが報告された。その対応を巡って、危険度についての現状把握、隣接のアバコの問題にも絡み、建て替え、移転等の将来的な展望を問いたが、質問や意見が強く述べられ、「その重大な緊急性に鑑み、対策委員会を設けて事に当たるべきだ」という提案がなされた。

この件については、翌18日、石橋秀雄議長と、藤掛順一常議員、鈴木功男常議員、藪田安晴年金局理事長を委員とし、内藤留幸総幹事、藤盛勇紀総務幹事を担当幹事とする「会館問題小委員会」設置が決議された。

全国財務委員長会議報告では、被災教区の負担金減免について審議されたこと、また教区活動連帯金配分協議会が引き続き開催されたことが報告され、別記(2面)の協議会報告に記したように、詳細にわたる質疑となった。

日本キリスト教協議会(NCC)に関して、理事會組織に変更する案が有力であるが、流動的で不確定要素があることが報告された。NCCの活動の現況、教団との関係、負担金についてなど、根幹に関わる事柄に及ぶ質疑がなされた。

特にNCCの姿勢に批判的な意見が強く述べられた。一方で、改革、関係改善に繋がると、NCCの改革案を歓迎する意見もあった。例回のように、逝去教師・宣教師の報告があり、その働きを覚えて、感謝と追悼の祈りが献げられた。

8月9日に行われた第2回常任常議員会について、東日本大震災救援募金、同

ボランテニア支援、キリスト教会館耐震簡易診断などについて協議対応したことが報告された。

常設委員会ならびに常設専門委員会報告について、それぞれ詳細な報告がなされ、質疑があったが、随時掲載している各委員会報告に譲る。特筆すべき事項としては、伝道委員会から、委員会報告の中で、次のように提言がなされた。

「教団には諸教会の要望に応え、伝道のための予算を持ち、更に長期的な研究や計画を作成し実施できる、教団全体の伝道体制に対し責任と継続性を持つ部署が必要である。そのような意味で伝道局設置の必要性を

「宣教基礎理論」で白熱した議論

第37総会期の宣教研究所は、『信仰の手引き』発行作業によって中断していた「宣教基礎理論」の見直し作業を再開している。現在の作業状況は、目次立て、ガイドラインの作成、宣教基礎理論に盛り込む主要項目の決定を経て、原案作成の作業中である。

その状況のもと『宣教基礎理論』改訂のためのガイドライン』が常議員会報告に資料として提出された。

このガイドラインの性格について質問があり、今回のガイドラインはあくまでも現段階における委員会内部の共通理解を示したものであって、今後、これに基づいて完成したガイドラインを常議員会で検討してもらう予定であるとの回答があった。

ガイドラインの内容については、宣教と伝道という言葉の問題、基礎理論の具体的な適用の問題に議論が

た。この件を巡り、干渉か指導か、そも教区にそのような権限はあるのかとの激しい議論になり、教区と教会との関係そのものを問うこともあった。

石橋議長は「教団と教区との関係は、信仰職制の答申に基づいて判断したい」と述べ、收拾を図ったが、議論は続いた。

信仰職制の答申そのものについては、内藤総幹事は、既に新報に掲載したことだと説明し、岡本知之副議長は経緯を説明した上で、「教団では、この答申に基づいて、教区との関係を構築する。教区と教会との関係も明記されていると受け取る」と述べた。

教師検定について、委員非とを問う意見が北紀吉常議員より述べられ、宇野稔東中国教区議長は、今総会期教団に委員を送っていない教区としては、矛盾を来す事柄であったと説明し

集中した。「I宣教とは何か」の第2項目、『宣教』は、第一義的には、従来の言い方で言う「伝道」のことである。に対する質問から、「宣教」と「伝道」という言葉の定義を巡る議論がまず活発となった。主な議論は以下のとおりである。

「従来の云々という文言はどういう意味か。これに對しては、「伝道」という言葉が使われていなかった

背景を踏まえたものであり、また一義的・二義的という言葉に捕らわれて欲しくない、また、宣教と伝道とを区別し、宣教は福音の伝達、伝道は福音の伝達と捉えている、との回答があった。

この事柄に関しては、「伝道基礎理論」にしてほしい、狭い意味の伝道に特化してよいのではないか、正面に信仰告白を据えてほしい、などの意見が寄せられた。さらに、評価する意見がある一方で、宣教について

ての多義的な意見がある現状で、「宣教とは何か」のまとめは乱暴であるとの意見もあった。

また、社会活動基本方針についての見直しは異なる観点でなされたものであり、今回のガイドラインに沿って新たに見直しをもらいたいとの要望が出された。その他、次のような要望も出された。

差別されている人に神の愛を伝えるために具体的な方法で現してほしい。若い人への伝道に役立つことを入れてほしい。キリスト教が女子教育や福祉に大きな貢献をしてきたことを踏ま

えて、伝道的手段に取り入れてほしい。より地域のことを考えるものを盛り込んでほしい。組織を見直して教会を立てていく施策を「宣教の方法」に入れてほしい。

宣教の方法に関連して、69年の機構改正のゆえに、教団として進められていた伝道が教区に丸投げされた結果、その当時立てられた教会を維持するために教区が互助に苦慮することになったとの指摘がなされ、その反省も踏まえてガイドラインを作成してほしいとの要望もあった。

(秋葉恭子報)



会館問題をはじめ、切迫した課題に立ち向かう



世界宣教委員会報告に当たる木下委員長(東京教区議長)、手前右は上竹裕子磐城教会牧師(4 面参照)

第 37 総会期
第 4 回常議員会

緊急シン・ポジウムの評価巡り論議
救援対策本部報告・震災対応

2 日目の午後、「救援対策本部報告の件」と「震災対応に関する件」が併せて上程され、審議された。

救援対策本部では、主に岡本知之副議長より「シンポジウム準備委員会報告」「11246 祈りの時」の報告があり、また被災地域を有する、東京(木下宣世議長)を含めた 4 教区からの被害状況および対応、会計などの報告がなされた。

震災対応に関しては、加藤誠幹事より、東北教区被災者支援センター(エマオ)におけるボランティア活動、石巻築山ワークのボランティア要請が増加していること、また遠野・自殺防止センター活動支援、福島第一原子力発電所事故による放射能被害への対応などについて報告された。

質疑応答では、「東日本大震災救援募金」について「救援対策は募金・海外は献金、教団の募金は献金。違和感がある。献金という趣旨が記されるべき。教団を通すケースと教区を通すケースがある。教団救援対策本部に一本化してほしい」との意見があった。

これに対し、福首によって問われるときとしてシンポジウムはよかった「救援の原点は礼拝である。そこで御言葉を聞いて救援の力を得ると聞いた。その点について、震災の前後も変わってほならない原点であると思う。そのことを明確にしてくれた。救援活動を支付けてくれた」シンポジウムはいろんな人がいろんなことを受け止めてゆく性質のものである」など活発な意見が交わされた後、各報告はいずれも承認された。

下記は被災 3 教区の報告で、特に強調されたこと、または印象に残ったこと。救援対策本部事務局報告については、本紙 473

委員会目的そのもので議論

伝道方策検討委員会

今回の報告は、すでに教団新報等に掲載済であることが確認され、なお次のような幾つかの討議がなされた。

教区活動連帯金検討委員会との合同協議を予定しているとのコメントに、伝道方策委員会に吸収するつもりかとの質問があり、協議

常議員会ではシンポジウムによって答えが出ると説明されたが、被災地の出席はほとんどなかった」と意見があった。

6 号に特集の予定がある。奥羽教区(邑原宗男議長)第 22 号となる「被災教会状況」が配布された。初動報告はこれで終了とのこ

被災教区の減免処置要望

歳入歳出予算

2012 年度歳入歳出予算案、経常会計 2 億 766 6 万円、収益事業会計 2 7 10 万円が予算決算委員会より提案され可決した。

伊藤瑞男予決委員長は原案を次のように説明した。経常会計収入では、負担金は 11 年度原予算に対し 0.5 % 減、2 億 6179 万円。

減額割合は 11 年度同等、各教会の財務状況を勘案した判断である。震災被災教会の教団負担金部分の減免処置は計 880 万円となり、または印象に残ったこと。減額分を被災 3 教区以外の教区で分担する。

と。宮古教会、千厩教会、大船渡教会、新生釜石教会の近況が記され、これらの教会への訪問者、ボランティアの写真が沢山盛られ、建物と共に人の心の復興(復交)が大事にされている様子が伝わってきた。

害状況が一覧表により詳細に報告された。被害の大きいこと、広範囲なことに今更のように驚かされる。併せて、教区被災者支援センターについても、各地でのボランティアの動きが報告された。教区として重点的に対応すべき会堂・牧師館が上げられた。

関東教区(秋山徹議長)教区被災支援委員会報告として、各教会の状況が実に詳細に上げられた。被害額合計、教会・伝道所約 3 億円、幼稚園・保育所約 8 千万円、またアジア学院を入れると合計 10 億 8 千万円となる。

説明を受け、被災教区議長からは、被害状況、再建状況は刻々動いているので実情に合った減免処置が強く要望された。また減免分を負担する教区からも厳しい財務状況が訴えられた。

直して支出を抑制するよう意見があった。内藤総幹事からは、NCC 分担金減額がまだ確定されておらず、増額の可能性が追加説明された。これに對しては予算案を堅持するよう意見があった。

大胆な提案巡り議論白熱

教区活動連帯金検討委員会

岡本知之委員長が、第 4 回委員会での協議内容を報告し(新報 4734 号参照)、この件について活発な議論がなされ、1 日目の夜の時間全てが費やされた。

岡本知之委員長が、第 4 案は枠を超えていること、1 パーセントの拠出が難しいこと等から、一旦終了し、新たなものとして考えた方がよいとの意見が出された。また、今は東日本大震災復興のために教団を挙げ

ありようについての省みと考え方を聞きたい、あるいは、教団がしてきた伝道をまとめるべきではないかととの意見に対しては、それは当該委員会の課題ではな

く、宣教研究所の課題である、との認識が示された。この件に関連して、従来の開拓伝道は伝道所が教会となることを目的としているが、それには無理があっ

現状把握進むも残る課題

センター明確化推進小委員会

センター明確化推進小委員会報告では高橋潤委員長が現状の報告と今期委員会

の取組みの目標について報告した。3 総会期にわたる小委員



▼ガブリエル。前任地の教会員が飼っていた犬の名前だ。犬に天使の名前を付けるとは冒瀆的だと思われるかも知れない。しかし、何事にも、曰く因縁ということがある。怒らずに聞いて貰いたい。▼不幸な幼犬期があったのか、彼は家人だろうが誰だろうが見境なく噛みつく。そこで、正式な命名を待つまでもなく、ガブリとなった。▼ガブリと噛むが、何しろ幼犬、この家の子どもたちには、噛む仕事さえ可愛い。間もなくクリスマスになり、誰ももなく、ちょっと可愛げなエルを付け加えて、ガブリエルと呼んでいた。▼こうして可愛がつて貰っていれば、犬の気持ちだって和む。噛まなくなった。そこで、ガブリは外されてエルとなった。その後も、正式な名前は、ガブリ・エル。▼別な知人の飼ひ犬は、ウエルカム。商売をしている人ではないが、それ向きの名前だ。しかし、由来を聞くと、商売向きではない。ウエルカム、漢字で表記すると、吠える噛む(ホエルカム)。▼逆手に取って「この子が吠えるのは大歓迎の意味なんです。ホエルカムです」と言っていれば、可愛がつて貰え、吠えなくなるかも知れない。しかし、ガブリと噛むのを、「この子なりの歓迎なんです」と説明するのは無理か。人間の中にも、その辺を間違えている人は、決して少なくない。

を尊重する制度を検討してほしい、現状維持こそが何十年に渡る伝道の形である等の意見が出された。意見、質疑を受け、岡本委員長は以下の点に触れた。現在の制度は、拠出教区、受け入れ教区が固定化されていることが問題。指標をもとに配分するのを止めて、事例を中心に配分していくための変更である。現状維持のための資金配分

た、体力に見合ったものであるか、判断の足並みは一樣ではない。各教区センター等の判断は、残留、または移行の判断を決定している教区、教区の判断とセンターの意向にズレを生じているケース、なお判断保留で検討中のケースがあることが確認された。

とした。各教区、センターの判断を促すため、教団に残るセンターのあり方をさらに明確にし、各種センター規則案、会計基準案を作成して提示する。これによって教団事務局と各種センターの位置づけと主として会計上の確認が可能となるという判断である。

規則案、会計基準案は次回常議員会に提出するよう準備中と報告された。(渡邊義彦報)

磐城教会 特別伝道礼拝

震災から 7 ヶ月、再創造の期待を持って

東日本大震災から7か月を過ぎた私たちは、特別伝道礼拝を迎えた。特別伝道礼拝は、レクリエーション（再創造、神が私たちをこの礼拝から新しく創造してくださるという期待を持って祈り、計画を始めた。特別伝道礼拝は、当教会の恒例行事であったが、今年度は、やはり大震災を踏まえずには何も考えられない。具体的な計画を始めたのは震災から半年が経とうとしていた時であり、改めてこの半年間の変化や兆しを問われる機会も少なくなかった。

大震災以来、私たちの礼拝の歩みは痛みの中にあった。4月、着任したばかりの礼拝で、聖壇から見る幾人かのお顔には涙が流れていた。何とかしてこの痛みを取り去り、慰めの言葉を語らねばならな

いと躍起になった。しかし、6月に参加した聖学院主催の教会と学校との懇談会で講演と報告を伺い、礼拝に向かう姿勢を根本的に問い直された。7月から、礼拝で嘆きの詩編を祈り続けた。この月、一人の兄弟が病に倒れ、集中治療室での闘病と共に家族の看取りが始まった。兄弟は、特別伝道礼拝の2週間前に召された。復興の中にも、嘆きは確かに残されている。

一方、特別伝道礼拝のテーマとして「嘆き」を前面に出すことには抵抗を覚えた。普段あまり礼拝に来られない方を教会にお招きする場に、ネガティブなテーマはふさわしくないように思えた。教会には明るいイメージが必要ではないか？ 役員会で意見交換をしていく中で、違う意見も

出た。震災によって、思いもよらない人々との出会いが与えられたことへの感謝である。最も困窮していた時に、日本ホーリネス教団諸教会から物資の支援をいただいたことは忘れられない。たくさんの方々

が私たちの教会を憶えてくださり、実際に足を運んでくださった。一方で、教会生活を共にしてきた兄弟姉妹との別れも経験した。それぞれが、さまざま思いを心の深いところに抱えており「嘆き」の通奏低音は響き続けている。教会を明るく見せようとか、元気な言葉を捻出しようとかというのではなく、神の前に本当の自分を置くことのできる素直な場所として教会が開かれるよう願った。ネガティブなものもポジティブなものもすべて神への献げものとする。さらに、聖歌隊の奉仕を申し出てくださったのであ

る。私は、藤沢教会の礼拝がどのように計画されているのかも知っており、一度に30名近い聖歌隊のメンバーが抜けてし

まつことは申し訳ないように思えた。しかし、主任の村上実基牧師は、藤沢教会が毎週完璧な礼拝をささげねばならないわけではない、磐城教会の礼拝の助けになればそれでよいとおっしゃった。私たちの礼拝は、20名に満たない小さな群れである。完全なものには遠いかもしれないが、確かに、主のからだの肢である諸教会とつながられ、補い合っている。主の日は、いわきで、藤沢で、全国各地の至るところで讃美の音が上げられ、そしてそこには天の軍勢の讃美も加わっているに違いない。大いに励まされた。

この度の特別伝道礼拝に説教者としてお招きした松本周牧師（聖学院大学）は、土浦教会の嶋田恵悟牧師と日立教会島田進牧師と共に、震災以降初めて当教会に駆けつけてくださったお一人である。3月31日午後、ちょうど私がいわきに入って2時間ほど後のことであった。その時はまだ、教会員の半数以上が避難していた。松本師は、度々福島・いわきを尋ねてくださり、震災からの歩みを憶えていくくださった。松本師と藤沢教会聖歌隊指揮者の木村牧子姉、そして当教会の三者間で具体的な計画を進めた。当教会の7か月の歩みを顧みながら「嘆きと感謝」のテーマを思い巡らし、メールでやり取りをする中で、福島、埼玉、神奈川にある私たちの計画は、驚くほどに響き合った。

礼拝は、聖歌隊による招きの讃美「静けさのただ中で」（アイオナ共同体）から始まり、第二コリント1章3〜11節が朗読された。ヨハネ福音書2章の「カナの婚礼」の朗読の後、松本周師を通して、深い慰めのみ言葉をいただいた。教会員の家族や友人方、幼稚園の保護者など8名の新来者を迎えた。

午後の讃美集会には、いわき市内にある常磐教会、勿来教会の皆さんをお招きした。第一部は、聖歌隊による讃美として、瞬きの詩人と呼ばれる水野源三氏の歌「主よ、なぜ」「主よ、御言葉をください」などを聴いた。第二部では、立証と木村牧子姉の独唱「二羽のすずめ」に耳を傾けた。第三部では、木村姉のリードにより一同で讃美する時間を過ごした。

その中の一曲として、関東大震災から生まれた「とおきく」にや（聖歌）をリクエストされた松本師が、震災で会堂が取り壊された福島教会を訪問され、更地に取り外された十字架が横たわっていたこと、「とおきく」の「十字架」の「十」字架はかがやけり」のフレーズが頭に巡ったことをお話しくださった。常磐教会の会堂もまた、半壊の判定を受け、この冬、取り壊される。そのような痛みの中でも私たちは、十字架の光を見つめて歩み

たい。

最後に、「キリストの平和」の歌の間、参加者すべての人たちが握手し平和のあいさつを交わした。常磐教会の武公子牧師の祈りにより、会を閉じる祈りが導かれた。

（上原裕子報）
磐城教会牧師



震災から 7 ヶ月、待望の伝道礼拝。藤沢教会聖歌隊の奉唱。出席者全員が握手し、平和の挨拶を交わした。手前中央は説教者の松本周牧師

私に、藤沢教会の礼拝がどのように計画されているのかも知っており、一度に30名近い聖歌隊のメンバーが抜けてし

まつことは申し訳ないように思えた。しかし、主任の村上実基牧師は、藤沢教会が毎週完璧な礼拝をささげねばならないわけではない、磐城教会の礼拝の助けになればそれでよいとおっしゃった。私たちの礼拝は、20名に満たない小さな群れである。完全なものには遠いかもしれないが、確かに、主のからだの肢である諸教会とつながられ、補い合っている。主の日は、いわきで、藤沢で、全国各地の至るところで讃美の音が上げられ、そしてそこには天の軍勢の讃美も加わっているに違いない。大いに励まされた。

この度の特別伝道礼拝に説教者としてお招きした松本周牧師（聖学院大学）は、土浦教会の嶋田恵悟牧師と日立教会島田進牧師と共に、震災以降初めて当教会に駆けつけてくださったお一人である。3月31日午後、ちょうど私がいわきに入って2時間ほど後のことであった。その時はまだ、教会員の半数以上が避難していた。松本師は、度々福島・いわきを尋ねてくださり、震災からの歩みを憶えていくくださった。松本師と藤沢教会聖歌隊指揮者の木村牧子姉、そして当教会の三者間で具体的な計画を進めた。当教会の7か月の歩みを顧みながら「嘆きと感謝」のテーマを思い巡らし、メールでやり取りをする中で、福島、埼玉、神奈川にある私たちの計画は、驚くほどに響き合った。

礼拝は、聖歌隊による招きの讃美「静けさのただ中で」（アイオナ共同体）から始まり、第二コリント1章3〜11節が朗読された。ヨハネ福音書2章の「カナの婚礼」の朗読の後、松本周師を通して、深い慰めのみ言葉をいただいた。教会員の家族や友人方、幼稚園の保護者など8名の新来者を迎えた。

午後の讃美集会には、いわき市内にある常磐教会、勿来教会の皆さんをお招きした。第一部は、聖歌隊による讃美として、瞬きの詩人と呼ばれる水野源三氏の歌「主よ、なぜ」「主よ、御言葉をください」などを聴いた。第二部では、立証と木村牧子姉の独唱「二羽のすずめ」に耳を傾けた。第三部では、木村姉のリードにより一同で讃美する時間を過ごした。

その中の一曲として、関東大震災から生まれた「とおきく」にや（聖歌）をリクエストされた松本師が、震災で会堂が取り壊された福島教会を訪問され、更地に取り外された十字架が横たわっていたこと、「とおきく」の「十字架」の「十」字架はかがやけり」のフレーズが頭に巡ったことをお話しくださった。常磐教会の会堂もまた、半壊の判定を受け、この冬、取り壊される。そのような痛みの中でも私たちは、十字架の光を見つめて歩み

たい。

最後に、「キリストの平和」の歌の間、参加者すべての人たちが握手し平和のあいさつを交わした。常磐教会の武公子牧師の祈りにより、会を閉じる祈りが導かれた。

（上原裕子報）
磐城教会牧師



1932 年生まれ。79 歳。玉川教員。

【教団新報 4734 号 お詫・訂正】
1 面 秋季検定試験報告 1 段目、「再受験」2 箇所を削除して「A コース 4 名、B コース 3 名」に、お詫びして訂正いたします。（教師検定委員会）
2 面 教区活動連帯金検討

委員会記事 2 段目「地域の民度」を「民力」に、お詫びして訂正いたします。教区活動連帯金検討委員会
3 面 部落解放センター運営委員会記事「第 3 回部落解放センター運営委員会」に、お詫びして訂正いたします。（年金局）



成井 透さん

真理を伝える課題と向き合う

人が少ない。やってみろ」と促された。全作家協会における選評に「イデーにおいて傑出している」とあった。リアリズムに対して「イデーがあってストーリーがある」というのは、「たねの会」のもっている方向性でもある。「父なる神」のイデーを失わない点で、遠藤周作ら日本のカトリック作家とは一線を画する。しかし、これが、日本におけるプロテストント文学の確立につながる要素である。退職後、15 年間、日本聖書神学校で「日本人とキリスト教文学」の講師を務めたが、今でも、椎名の継承は課題としてある。

1957 年、三崎町教会で山北多喜彦牧師より受洗。胃がんを患い、回復するも、残された時を意識するようになった。

昨年「たねの会」は 50 周年、今年、椎名生誕 100 年。韓国のプロテストント作家たちとの関わりの中で、カトリックであった安重根を取り上げた小説に取り組む。歴史認識を乗り越える福音の力を信じて。